

「カタギ系」青年たちの精神史

福岡良明『「働く青年」と教養の戦後史』（筑摩選書）を読む

長崎励朗

一 本書の要約

本書は『葦』や『人生手帖』といった人生雑誌を素材として、戦後の日本を支えた勤労青年たちと教養主義の関わりを明らかにした作品である。

筆者は冒頭で二つの問題意識を提示している。第一の問題意識はインテリと大衆の関係性についてである。「インテリと大衆がぶつかり合いながら絡み合う状況」がいかにして生まれ、やがて衰退していったのか。また、知識人への憧れと反発が両立していた時代から、やが

て憧れが削げ落ち、反発だけが残っていったのはなぜなのか。こうした問題意識によって、本書は歴史書であるのみならず、今日の状況を読み解くための知識社会学の書としても一級の論考となっている。

本書で提示されている第二の問題意識は読者共同体の成立理由とその機能を明らかにすることである。勤労青年たちは何を求めて人生雑誌を読み、またそこから何を得ていたのか。これはメディア研究としてオーソドックスではあるが、重要な論点をはずさない問いかけであるといえよう。

以下ではまず、こうした問題意識のもとに書かれた各章の内容を要約しておきたい。

第一章は、『葦』創刊者の山本茂實の経歴を追いつつ、『葦』創刊の動機や読者共同体に焦点をあてている。貧困にあえぎながら刻苦勉励する山本の半生が、『葦』を創刊する動機となったこと、そして『葦』の読者たちがやはり山本とどこか似通った環境に置かれていたことが論じられているが、とりわけ面白いのは、ここで筆者が用いている「反知性主義的知性主義」という言葉である。『葦』の読者であった、格差や貧困のために進学できなかった鬱屈した青年たち。彼らは知識人に対する憧れと反発を同時に持ち合わせており、知識人の知を奪取しようと試みた。これこそが当時『葦』を支えていた青年たちのエートスであり、非インテリの公共圏の基盤となっていた「反知性主義的知性主義」であったという。

第二章は、『人生手帖』が創刊し、人生雑誌の隆盛が目立った一九五〇年代に焦点をあてた章である。こ

の章では教育機会の拡大や刻苦勉励のエートスが読者たちにもたらした逆機能が随所でクローズアップされている点が面白い。高校進学率が高まれば高まるほど、進学できなかった者の鬱屈はより深くなる。「マルクスみかん水」と呼ばれた人生雑誌の読者たちは、社会批判に関心を持てば持つほど、雇用主から「アカ」とみなされ、自身の状況を悪化させてしまう。彼らが学歴エリートに対する転覆戦略として、学歴の空虚さを批判すればするほど、自身の階級上昇からは遠ざかってしまい、階級の再生産を引き起こしてしまう。人生雑誌は「背伸びの文化」とも言われた中間文化を下支えするとともに、その影の部分をつつしだすメディアでもあったというのである。

第三章は、一九六〇年に『青春の手帖』が創刊するも、人生雑誌が凋落していく六〇年代時代を扱っている。なぜ青年雑誌は凋落していったのか。その理由として、筆者はいくつかの社会的変化を挙げている。第一の原因は「政治の季節」の到来である。前述のよう

に「マルクスみかん水」とも揶揄された人生雑誌は、一九六〇年代当時の青年たちからはあまりにも微温的であるとみなされたのだ。第二の原因としては高校全入時代に入り、高校にいけない理由が貧困から学力の不足へと変化したことが挙げられている。このような状況における非進学者からは、学力と親和性の高い教養は指向されにくい。このことはすなわち、「順調なコースを歩む層」でも「マンボにうつつをぬかず連中」でもない『第三の青年』の消失をも意味していたと筆者は言う。青年たちのエートスが鬱屈から、消費文化を旗印にした希望へと変化していく中で、「生き方」や「真理」の探究はかつてほど顧みられることがなくなっていたのである。

第四章は、人生雑誌の「その後」を追跡した章となっている。一九七四年、『人生手帖』は『健康ファミリー』へと改題する。筆者によれば、唐突に見えるこの変化には必然性があったという。『人生手帖』においても、一九六〇年代後半になると、公害問題を背景

に社会批判を通して「食」への関心がせりあがってきていたというのである。そもそも健康志向と刻苦勉勵のエートスには親和性があった。これに加えて、支配的な制度知を批判しながら新たな学知を提示しようとした健康言説は、かつての『反知性主義的知性主義』ともどこか通底している。その意味で、人生雑誌の健康志向への転換は、左派的な思潮や運動が消費文明批判や環境、有機農業に向いていった過程と相似的であったという。

以上のような内容を踏まえて、ここからは本書の内容についてさらなる検討を加えたいうえで、今後発展しうる論点をいくつか提示してみたい。

二 「反知性主義的知性主義」の限界と可能性

―アメリカ的な文脈との相違

まずは本書で最も重要かつ興味深い「反知性主義的知性主義」という言葉について考えてみたい。筆者は

リチャード・ホフスタッターの『アメリカの反知性主義』を参照しつつ、反知性主義という言葉が非常に注意深く論じている。というのも、本書の刊行より少し前に「反知性主義」という言葉を冠した論考が多く出版されていたからであろう。ほんの一年ほど続いた

「反知性主義」ブームだが、それは「功」というより「罪」の大きいものであった(一)。インテリ批判としてのホフスタッターの議論を換骨奪胎し、論敵を批判する道具として用いるような議論が横行したからである。筆者はこうした愚を犯さぬよう、慎重にこの言葉を用いたわけである。その意味で、本書はかなりの程度ホフスタッターの議論を正統に受け継いでいると言える。

しかし、その一方でアメリカの理論を日本に適用する際の限界もほの見える。というのも、アメリカの反知性主義はヨーロッパ的知性に対するオルタナティブな知を指向していたのに対し(二)、本書で言う「反知性主義的知性主義」は少なくとも六〇年代前半までは

教養という一元的な知のあり方に縛られていたからだ。人生雑誌がそうしたアメリカの反知性主義に近い性質を持つようになるのは、むしろ本書の終盤に登場する健康志向が強まり、有機農法などに目を向け始めた時期ではないだろうか。

とはいえ、筆者の指摘する通り、人生雑誌から健康雑誌にいたるまでは一定の連続性も見られる。そう考えれば、戦後の大衆教養主義の時代、あるいは中間文化の時代とは、そうしたオルタナティブな知の揺籃期と捉えてもよいのかもしれない。本書がこうした動きの連続性や一貫性を指摘したからこそ、今後は変化に着目して研究する地盤ができたともいえるだろう。

三 「日本主義的教養」との連続性

ここまででは、アメリカ的な文脈との関係性において「反知性主義的知性主義」という言葉を考えてきた。以下では、筆者の他の著作との連続性に言及しつつ、

この言葉自体の可能性についても論じておきたい。

最初にこのパラドキシカルな言葉を見たとき、私はある種の既視感を覚えた。筆者自身も共著者として名を連ねている書籍のタイトルにも含まれている言葉、「日本主義的教養」とオーバーラップして見えたのである⁽¹⁾。そもそも西洋的な知を指す「教養」と「日本主義」の組み合わせは「知性」と「反知性」同様非常にパラドキシカルである。加えて、先に述べた「オルタナティブな知」という意味で反知性主義を捉えるならば、日本主義的教養こそ、日本における「反知性主義的知性」の古層ではなかったか。あくまで推測に過ぎないが、こうした過去の仕事があつたからこそ、筆者がこの言葉にたどり着いたと考えることもできるのだ。

実は、こうした問題を的確に捉えた論考も存在する。アメリカ文学者の後藤和彦は、「近代の超克」をそうした西洋的な知、一元的な知を克服しようとする涙ぐましい試みとして描き出している⁽²⁾。その後

こうしたオルタナティブな知への志向は八〇年代にポストモダン論の流行（あくまで西洋発信ではあるが）が起こるまでいわば潜伏することとなる。

日本主義的教養や近代の超克、ポストモダンといった言葉は時代や思想的位置関係を違えつつも、いずれも「オルタナティブな知」への欲求を示す言葉だ。その意味で、本書で生み出された「反知性主義的知性主義」という言葉は、人間に内蔵された普遍的な性質を切り取っているとも考えられる。今後、こうした動きを歴史的に扱う際の道しるべにもなりうる重要な術語であると言えるだろう。

四 健康志向と人間関係の分断 食と思想の相関はなぜ起こったか？

本書の中でとりわけ目を引くのは、終盤で登場する健康志向への傾斜である。本書が基本的には人生雑誌に関する研究である以上、本来なら『健康ファミリ

―』への誌名変更とともに記述を終えてもよかったはずである。しかし、この時期について検討を加えたことで、結果的に本書は今日的な問題系とも接続する切り口を持つことになったともいえる。

例えば、速水健朗の『フード左翼とフード右翼―食で分断される日本人』は本書で扱われている健康志向の問題の延長線上に位置づけることができる。速水は現代における食と思想的背景の相関に目をつけて議論を展開している。無農薬や有機栽培などに強い関心を示す層は、裕福で思想的にリベラルな層が多いというのだ⁵⁵。速水の議論自体は面白いのだが、そうした相関がなぜ起こるのか、という理由についてはあまり切り込んではいない。その意味で、こうした相関の原因を歴史的に明らかにした本書の功績は大きい。単に個々人の趣味嗜好に還元するのではなく、より大きな文脈で社会的分断の原因を明らかにすることにつながるからだ。

五 メディアとしての人生雑誌

このことを受けて一つ指摘しておきたいことがある。それは、この時期にいたるまでの人生雑誌が、メディア論的に言えばオーソドックスな意味での「雑誌」ではなかったのではないかということだ。

筆者が指摘するように、健康に関する情報を重視するようになったことは、人生雑誌が公的・形而上的な問題ではなく、私的・形而下的な問題を扱うようになったことを意味する。すなわち、「食」をはじめとする形而下の問題を扱うようになったとき、人生雑誌は「つながりのメディア」から「分断のメディア」になった。雑誌が本来、細分化メディアであることを考えれば、人生雑誌はここではじめて、一般的な「雑誌」へと変化した、あるいは転落したといえるのではないだろうか。

そう考えてみると、健康志向に転換した時期を記述したことは、本書があくまでメディア論的な研究であ

ることを物語っている。人間関係を切りつつ統合するメディアのあり方を描き出すことにこそ、現代におけるメディア論の真骨頂だからである。

六 「カタギ系」学生を救うヒント

最後に、現代の若者論とも本書を接合しておきたい。

『教養主義の没落』で知られる竹内洋氏から以前、こんな話を聞いたことがある。資料として残るのは、目立って優秀なエリート学生と目立って質の悪いヤンキー系学生に関する記述である。しかし、圧倒的多数の学生はそのどちらでもない「カタギ系」学生ともいえる若者たちであり、彼らこそが社会を支えているのだ。彼らの姿をどうにか捉えられないものか、と。

本書はおそらく初めてこの竹内氏の問題意識に答えを出した著作と言つてよい。本書が扱っている人生雑誌の読者たちはいつの時代にも多く存在する「カタギ

系」の若者たちなのだ。だからこそ、本書の第二章が投げかける問題には今日的な意味がある。

当時、学歴エリートを叩こうとした動きは果たして「カタギ系」の若者たちを幸せにしただろうか。前述のように、むしろ彼らの階級上昇にとって不利に働いたという議論が本書では展開されている。

これを現代に置き換えてみればどうだろうか。現代の日本における学歴エリート叩きは「コミュニケーション能力」信仰として表れている。大学入試では、AO入試などによつて「コミュニケーション能力」が試され、大学入学後も入社試験に向けて「コミュニケーション能力」の育成が叫ばれている。

学力エリートはコミュニケーション能力が不足しているという紋切り型のイメージがこうした動きを加速させていったことはほぼ間違いない⁶⁾。しかし、実際にこうした「コミュニケーション能力」の押し付けがかえつて沈黙考型の「カタギ系」学生の自信を喪失させ、社会から排除する結果を招いているのでは

ないか。本書が描き出すかつての「カタギ系」青年たちの姿はそうした懸念を惹起する。

本当に重要なことは学歴エリートを叩くことではないし、ましてや若者に「コミュニティ信仰」を押しつけることでもない。かつて人生雑誌の読者共同体がそうであつたように、「カタギ系」の若者たちが互いにつな

(二) 例えば、内田樹編著『日本の反知性主義』は治的意図を持つて書かれ、自身と対立する考えを持つものを「愚か者」と呼ぶ代わりに術語として「反知性主義」を用いている。

内田樹編『日本の反知性主義』晶文社、二〇一五年。

(三) 巽孝之「アメリカ文学と反知性主義の伝統」『アメリカの反知性主義』南雲堂、二〇〇八年、一九―五七頁。

(四) 竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代 大学批判の古層』柏書房、二〇〇六年。

がり、支えあい、自信を持ったための契機を用意することではないか。本書はそんな現代社会への処方箋を提示しているようにも見える。

(四) 後藤和彦「危機下の知性―アメリカ南部と近代日本」『アメリカの反知性主義』南雲堂、二〇〇八年、一五三―二八二頁。

(五) 速水健朗『フード左翼とフード右翼―食で分断される日本人』朝日新聞出版、二〇一三年。

(六) アキ・ロバーツ・竹内洋『アメリカの大学の裏側―「世界最高水準」は危機にあるのか?』朝日新聞出版、二〇一七年。